全国大会を振り返って

秋　山　　勉

気象学会の全国大会には奇妙に縁が深く、これまでに昭和５３年の仙台、昭和５８年のつくば、昭和６０年の大阪大会と過去３回にわたってお世話をするめぐり合せであった。そして今回は札幌大会の委員長という大役を仰せつかって、日頃横着な私にもうまくゆくかどうか少々気になる話ではあった。幸にして前年から支部の中に準備委員会が発足していて、準備の大筋についてはすでにレールが敷かれていた。とは云え、気象台の大巾な人事異動や理事の小林先生の急逝などで、役員の半数以上が入れかわるといった異常な状態での新年度のスタートであった。

全国大会のお世話をした昭和６２年は、北海道支部が発足してから丁度３０周年に当り、６月には盛大に記念行事を実施した。支部活動に功労のあった会員の表彰、北海道の気象についての記念講演、そして従来北海道支部だよりとして発行していた機関誌を新たに細氷と命名して、記念特集号として発行した。７月末には札幌市青少年科学館の協力を得て、夏季大学「新しい気象」講座を開催した。これらの学会活動が秋の全国大会に向けての支部役員相互のチーム・ワークづくりに役立ったと思われる。

本番を迎えるに当っては、実行委員会で綿密な計画を立てたが、大会はほぼ計画通りに進められた。本大会呼び物のシンポジムム“ドカ雪”が盛会裡に終了し、その夜赤レンガの開拓使会館ケッセルホールに、２００名をこえる多数の会員をお迎えして、北海道らしくサッポロビールの飲み放題といった趣向での懇親会を無事終了した時は、いささかほっとした。理事長からも身にあまる賛辞をいただいたりしたが、ひとえに実行委員の各位が絶対成功させるぞとの意気ごみでことに当っていただいたからに他ならない。５年後の札幌大会には気楽なＯＢとして参加させていただきたいものである。

気象学会秋季大会顛末記

花　房　龍　男

昨年の４月に北都札幌に転勤して最初の大きな仕事がこの日本気象学会秋季大会の開催であった。本来なら会場捜しや、資金ぐりなどに頭を悩ますところから始まるところであるが、北海道大学の先生や気象台の先輩達のおかげでこれらの仕事は殆ど完了していたので非常に楽であった。従って、小生の担当となったシンポジウムの実行計画のみに没頭しておれば良いということになったのは幸いであった。

シンポジウムを計画するにあたって一番頭を悩ましたのは講師の人数と選択であった。２転３転したあげく５名に決定したが、急に学会の総会が入り込んだため、結果的には講師の人に充分な話をしていただく時間が確保されないことになり、又自由討論の時間にも影響を与えた事は残念であった。せっかく５年に１度の地方の大会なので地方色を出そうと準備してきた地方会員にとってはシンポジウムの時間は貴重な財産である。定足数の確保など地方にとっては大変な努力が必要である。総会を地方で開催することについて本部の再考を望むものである。

時間の制約にも係わらずこのシンポジウムが成功したのは当日の講演の内容の事前の講師との打ち合わせ、質問の整理・天気掲載用の原稿の催促検討等、いろいろの細かい煩わしいことを黙々とやっていただいた座長や記録係りの上田（博）、若原会員らの努力のお陰である。特に播磨屋会員には天気掲載用原稿についてご面倒をかけた。ひとつの大きな行事の成功は目に見えない所で誠意をもってその仕事に励んでいる人たちのお陰であると再認識させられた。

学会の終りごろから台風１９号が北上し温低になり北海道に影響を与えた。このため翌日にゴルフを計画していたのがテレビ出演などのため中止になったのが唯一の誤算であった。誤算になったついでに強風の通り過ぎた日曜日にゴルフをする予定だった友人と寿都測候所を訪れ、日本海の空気を胸一杯吸い込んでゴルフの代わりにした。

ともあれ、小生にとっては楽しい気象学会でした。サッポロビール園のビールの味と共にいつまでも忘れない楽しい思い出として永久に残ることでしょう。

秋季大会をふりかえって

遠　藤　辰　雄

秋の全国大会を札幌で行うことが予定された二年前に準備委員会を、また正式に決まった一年前からは実行委員会を各々何回も開いていく過程でいやがおうにも、わが北海道支部の名誉にかけても、やるからには、より良いものにしようという気持ちになっていくのが人情であります。気象台の人事異動も偶然でしょうが、気のせいか大会に向けて最強メンバーが揃えられた感がありました。くしくも同じ年に重なった支部設立３０周年記念事業とその一環である記念号「細氷」の出版という、普通なら各々大事業であることを、秋の学会の前の軽いウオーミングアップとして難なくみごとにこなしたのも今期の関係者一同の強力さを示しているといえるでしょう。

資金面の準備も、従来に加えて、新しい企画を含め十分になされ、また会場の選定も適切であったといえます。また大会御当地の腕の振いどころであるシンポジウムも「どか雪」と銘うって企画され、講師も各分野の第一人者を揃え、講演の内容も良く、また会場の参加者からの反応も極めて活発でありました。その報告は「天気」誌上に異例の３１ページにも及ぶ長大な内容で報告されたことをみても、この成功が歴史に印されたことになります。これについては投稿された講師の方々の努力によるのは勿論ですが、会場での質議の記録をまとめ、これを編集・校正するつめのところで尽力された播磨屋さんの労を語らずにはおられません。

天気誌上を合法的に活用して設定した航空券・ホテルのディスカウントサービスは好評で本州からの参加者の約８割が利用してくれたのも、苦労のしがいがあったとうれしく思います。これは遠い地方大会の開催では大切なことであります。

懇親会も札幌大会ではもう恒例になったビールとジンギスカンの無制限サービスは矢張り若い人は勿論のこと多くの参加者に人気があります。おまけに記念品のおみやげもつきました。

私は大会の前日の夜に低温研で開かれた月例会「南極の気象」の司会から始まって、第１日目の座長、夜は全国理事会の懇親会、第２日目はシンポジウムの会場準備と座長、その後は懇親会の進行係などと、た

てつづけに動きのとれない状態の中で会場班総括に当ったのですが、三つの会場の責任者であった桜井さん・播磨屋さん・谷口さんとポスターセッションの上田さんなど、夫々ベテランの指揮のもとに理学部地球物理と低温研の学生の諸君が日頃から身につけた研究発表のマナーをいかんなく発揮して、会場の準備と進行に十分に対応してくれました。おかげですべて順調に進められたことに対し心から感謝いたします。

このようにみごとで盛大のうちに完了した大会の陰には、これを支えた多くの会員・役員や気象台の方々のボランティヤ精神によって支えられたことを忘れることはできません。そこには数々の苦労ばなしがありますが、ここでは会場に関係したことに限って振りかえってみることにします。

会場の予約は二年前から北大の学術交流会館として来ました。この容量は気象学会の地方大会の参加者数の約２００名余に対して、若干の余裕を残して適当な規模であります。期間中会場のどこについても混み合うことはありませんでした。その一つの理由には、矢張りせっかく北海道まで来たのでときどき散歩に外出する人も適当にいたことが後からわかりました。

最も困ったことは、初日の朝の緊張している集合時間に会場入口のドアがギリギリまで開けられないことがわかったことでした。規則で管理している公の施設の欠点が、ここに至って表われ、このことについて不勉強であったことがうらまれてなりませんでした。

会場の設備には近代的なものがとり入れられ十分なものが多かったのですが、ただ一つ、この節は大半が利用するようになったＯＨＰを主流として設計されていないことに気がつきました。これら若干のことは、次回に行うときの参考にしていただければ幸いであります。

思い出（接待班）1987年10月14～16日

松　村　博　勝

昭和62年度日本気象学会秋季大会が北海道大学学術交流会館において華やかに開催された。

接待班は３名で組織され大会運営の一端を担うことになった。

1. 準備：既に作成された作業マニュアルに基づき実行計画をたてるため、開催前日の午後、会場の下見にいき備品類の調達・借用の調整並びに接待場所の配置等また大会期間の茶の葉、コーヒー、砂糖、容器等の使用概数を事務局へ連絡し発注かたを依頼する。
2. 大会期間：当日は実行委員および各班員は午前８時に会場玄関前集合、ドアの開くのを待った。今にも小雨が落ちてきそうな肌寒い天気の朝だった。開館を待つこと約４０分漸く玄関がひらかれた。

入場後は各セクションとも右往左往の大多忙、一息する間もなく参加者が続々入場。大会の開始である。接待班は早速、湯わかし、パック茶、コーヒー・砂糖、紙コップ類を所定の机上に配給するとともにゴミ捨て用に大きなポリバケツを休憩所近くに設置し、使用済み紙コップや空のコーヒー・砂糖袋を捨ててもらうために置いたが、利用度は少なく始末は我々が実行する結果となったことは残念だった。

初日は無我夢中でおわった。

二日～三日目は接待作業も予定通り進み順調に過ぎた。期間中の接待について特に留意することは、参加者の嗜好であろう。この大会においてはコーヒー党が多かったことに驚いた。緑茶は限られた僅かな人に利用されたに過ぎなかったことである。

他に休憩コーナとその周辺は常に清潔にする様に裏方のみではなく利用者の協力も得たかった。

シンポジウムを運営しての感想

播磨屋　敏　生

今回の秋季大会では、実行委員として第２会場の責任者となったが、会場係の学生が手ぎわよく運営してくれたので、過去２回の大会で幹事長として飛び廻ったのに比べて非常に気楽であった。大会運営については他の人が書かれると思うので、座長としてかかわったシンポジウムについての感想を述べることにする。

座長を引き受けた時、次のようなことを考えた。過去のシンポジウムでは、その前に行われる総会等が延びて、十分な時間がとれずに、各講演者に対する質疑応答のみでシンポジウムの特徴である総合討論が十分になされない例が多い。そうならないようにしなければならない。そこでまず最初に各講演者の話題を調整するために、題名と内容を表わすキーワードを提出していただいた。それをもとにして座長側で全体の大枠と流れをまとめ、提出していただいたキーワードをさらにしぼって、各講演者へ講演内容を依頼した。その後、すぐ追いかけるようにシンポジウム要旨集のための原稿を提出していただいた。この要旨集の印刷配布は、シンポジウム参加者が事前に講演内容を知ることができるので好評で、この春の大会でも配布され定着した感がある。

大会間近になると、要旨集の内容を検討し、総合討論をどうはこぶかについて、座長団では綿密な打合せを行なった。当日は、臨時総会があり十分に時間がとれなかったとはいえ、総合討論では各講演者への質疑応答を越えた議論ができたと考えている。

シンポジウム終了後、講演者及び記録係の協力を得て「天気」へのシンポジウム報告を早急にまとめることができたことを各位に感謝している。「天気」の報告でも述べたように、冬季の中小規模じょう乱の現状と問題点が明らかとなり、今後理論的にも観測的にも研究をいっそう進めなければならないと考えている。この現象は、我々北海道に住むものにとって非常に関係の深いものであるので、当支部会員がいっそう興味を持ち、問題解決に一歩進めることができたなら今回のシンポジウムも意義のあるものとなり、運営にたずさわった者としても喜びとしたい。

日本気象学会秋季大会に出席して

桜　井　兼　市

５年毎に行われる札幌での秋季大会の中で昨年の大会は私にとって感慨深いものがありました。一つは昭和４１年の大会以来約２０年振りに会場が北大構内にもどって来た事です。昭和３６年と４１年には理学部の二つの教室が使われました。その後、大学紛争等で構内が騒々しくなり全国的に大会の会場が大学の外に出て行きました。更に大会規模が２会場であったものが３会場となり講義中の大学では会場の確保がまゝならなくなったのもその理由としてありました。今回の大会が北大の学術交流会館で行われた事は会場の設営の上で好都合であったと同時に、参加者が静かな雰囲気の中で討論が出来たと思います。

理学部で行われた学会に関連して、その当時大会を成功させた諸先生方が今大会では御一人も居なかっ

た事が大変淋しく感じました。北海道での雪物理学の基礎を作られた中谷先生をはじめ、黒岩先生、孫野先生そして昨春亡くなられた小林先生と学会の中心的役割をされた方々が故人となられ、学会の時の流れを感じました。今一番想い出されるのは初めて理学部で開かれた学会（昭和３６年）のシンポジウムで中谷先生が座長をされ、孫野先生と小林先生が話題提供者となり「降雪と雪結晶」について行われた事であります。それから２６年、今大会のシンポジウムで菊地さん、遠藤さん、播磨屋さんがそれらの役割をしました。今後北海道の気象学をなお一層発展させるために今まで以上の努力が必要であると感じました。

日本気象学会奨励金をいただいて　　三　品　　博

この度、日本気象学会秋季大会で奨励金を受ける栄誉に浴しました。多くの先輩諸氏や新進気鋭の若手の方々を差しおいて、私ごときがいただくのは何か面映ゆい気持で一杯でございます。

北海道生れの北海道育ちで、この２０数年間を道内の気象官署一筋に働いてきて、その地域独自の気象特性を見て参りました。交替勤務や夜勤の合い間を縫っての調査研究でしたので、十分な計画と時間のゆとりがなく、結果はいつも当初の目的とかなりかけ離れたものになったことが今思うと残念なことです。

私は帯広出身で最初の勤務地は帯広測候所でした。その後網走、稚内、釧路の各地方気象台で観測、予報業務に携わってきました。そこで興味を感じたことは気象特性が地域によって大きく異なることでした。これは率直なところ大きな驚きでした。私の３０数年を育ててくれた帯広の冬は、風が弱く毎日が澄みきった青空で大雪は一冬に一度か二度あるかなしかでした。私には冬の天気はこのようなものであると思っていたのですから。

ところが網走では流氷が到来すると海は一面真白な大平原に変り、このあとには厳しい寒さがやってきました。発達した低気圧で１メートル先も見えないブリザードに襲われたこともありました。稚内では、更に厳しい冬が待っていて毎日が横なぐりの風雪、太陽の顔を見ることがしばらくなかったことも記憶しています。

気象の地域による違いについては私なりに教科書の上では理解していたつもりです。しかし実際にそこで暮らしそこの気象を肌で体験してみると、その違いが私の想像以上に大きく、天気現象の奥行きの深さとその広がりに魅せられて了ったわけです。正直に言って私には深い学問的造詣はありません。

しかし釧路管内の最低気温分布の地域特性について、総観規模の場の中から少しでも解明し、地域の予報精度の向上に微力ながら尽してゆきたいと考えています。

この度の奨励金の授与ありがとうございました。

秋季大会の印象　　川　野　　浩

大会期間中、ずっと受付に座っていたため、講演をほとんど聞くことが出来ずに終わりました。最終日の午後に、もう受付に来る人は居るまいと思って、一つだけ講演を聞いたのですが、大気化学か何かの講

演で、こういう研究もやっている人もいるのだなあと思っただけで、どんな内容だったかもう忘れてしまいました。

大会の３日間は、特に忙しかったわけではないのですが（２日目からは、むしろ暇だったのですが）、何となく、慌ただしかったという印象です。『気象学会なんて無かったよ。夢でも見てたんじゃないの』と言われたら、本当に信じてしまうかもしれません。

会場係としての感想

加　藤　美　雄

初めての気象学会定期大会で、会場係として前日の準備、当日の受付を手伝いました。以下、感想と次の学会の参考になればと思い、２・３述べてみます。

(1) 大会１日目、会場は１５分前でないと開かないため、会場係は一般の入場者と同じように会場の前で待って、一緒に入ってすぐ受付の準備をしました。そのため、こちらが用意するまで受付を待ってもらうことになり、参加者の皆さんに御不便をかけたようです。会場の都合だと思いますが、受付だけは先に入って準備をしてから、参加者を入れるようにすべきだと思いました。

受付作業は、打合せの段階で確認していたので、当日はスムーズに進めることができました。特に受付と会計を別にしたことは、受付カードの説明と記入のチェックだけでお金の心配をしなくてよいため、大変よい方法でした。

(2) 受付が一段落してからは、他の人の協力もあって、研究発表を聞くことができました。会場の設備は３会場とも異なりましたが、研究内容はどこもすばらしいものばかりでした。特に、学生の発表は私たちとは違う面から調査しており、参考になりました。発表は時間の制約があるため、全体に質問時間が短く、質問する人も限られていたようです。その研究の第一人者が質問すると、あとは出ないようでした。このようなことが続く場合は、座長の工夫が必要ではないかと思います。

反対にポスターセッションは時間に関係がないため、発表者に教えてもらったり、十分討議することができました。今後はこの分野を２日間ぐらい設けてはいかがでしょうか。

(3) 総会では、新しい賞を作るための話合いがありましたが、あまり討論がされなかったようです。若い人の貴重な意見が議論されないまま終わったのは残念でした。結論はもっと多くの反対意見を聞いてから出すべきだったと思います。

最後に、気象台の参加者が少なかったのは淋しかったです。地区研究会で調査研究をしている職員が、気象台以外の人の研究成果を聞いて理解を深め、同じ研究をしている人と討論できるチャンスはそんなにありません。５年に一度の北海道で開催された大会なので、地方の人も出席して発表を聞くだけでも価値のあるものだと思います。

以上思い付くままに書きましたが、私にとって大変実り多い３日間でした。次は是非研究発表したいと思い、会場を後にしました。

会場係としての感想

川　村　雅　春

私は会場係の受付けとして大会３日間の内、２日目を担当しました。係員の皆様の協力により無事１日を終ることができました。１つだけ思うことは大会参加費の領収書の代りに氏名、所属、金額等を記入するカードを渡すのですが、出席者の中には外国からの方も数名いて、また日本語が全く理解できないという方もいましてカードに記入する際には困りました。今後からはカードには英文も併記したらどうでしょうか。とにかく楽しい受付けの仕事でした。

若手会――未来の気象学会を支える力

坪　木　和　久

若手会とは気象学会の若手の集りである。ここに云う若手とは、年齢の制限など特になく、あえて言うならば自分はまだ若手であると思う人のことである。若手会の集りは、学会のあるごとに、その開催地の若手が主催して学会初日の夜に行なわれる。そこでは全国の気象に関係する若手が一同に会し、親交を深めたり、最近の話題の情報を交換したりするのである。

昨年（昭和６２年）、札幌で行なわれた秋の学会では、我々北大関係の若手が若手会を主催した。恒例により学会初日の夜に、すすきのでその会はもたれた。この時はいつもにもましての盛況ぶりで、予約した５０人の席はすぐに一杯になり、その後も人は増え続け、会場は身動きできないほどになった。会では各人の自己紹介や自分の研究のアピールなどが行なわれ、冗談も交えながら若手会独特の自由な雰囲気で交歓がもたれた。会の最後には全員の写真撮影をし、参加者名簿を作成した。この時の写真は主催者の努力で参加者全員に配られた。この札幌での若手会では、前の若手会ではみられなかった新しい顔が多く、今回の学会に新しい若手がたくさん参加したことがうかがわれた。

現在、東京大学の沼口君を中心に若手会の名簿が作成されている。今のところ掲載者数２５０人で、さらに増えているということである。また若手間の情報誌の構想も現実化しつつある。このような最近の若手会の盛り上がりは、若手の活動の活発化の表われであると思われる。若手会は単なる若手の懇親会から、さらに内容のある情報交換の会へと発展しつつある。

若手会は日本の気象学会の底辺であると言える。そして未来の気象学会を支える力がここにあると言えるのではないだろうか。若手の自由な発想とインフォーマルな雰囲気で、この会がますます盛んになり、内容のある活動をするようになることを願い、またそうなるよう努力したい。

よ　い　経　験

李　　東　仁

５年に１回廻って来るという日本気象学会の秋季全国大会が昨年１０月に札幌の北大で開かれたことは北大の留学生である私としてはとてもよい経験になりました。韓国でも気象学会を地元で開催されたことがありますが、準備委員の方々の春からの事前準備、特に関連機関が大学と一緒に学会をてつだうことは韓国の釜山ではあまり見られないことでした。それほど北海道支部では大学との交流が大きいのがよくわ

かりました。

私も大会日には少しでも役に立ちたいと思って時計係やスライド係などいろいろなところに少しずつてつだいました。大会準備委員も、大部分が、自分の研究発表もあったのでとても忙しい日々だったと思います。しかしみなさんの頑張りがあったので進行はほとんど順調に進み、学会は成功に終ったと思います。

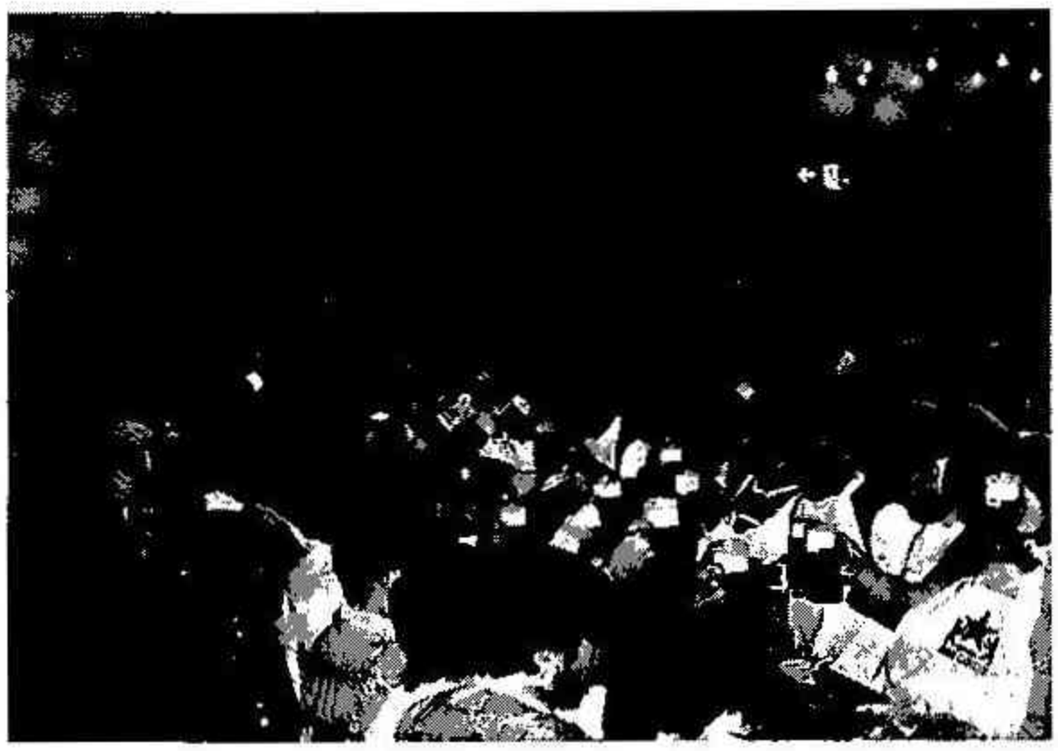
各大学や研究機関からおおぜい参加した人々は大会２日目の夜、懇親会として札幌ビール園で開かれたジンギスカンパーティをとても喜びながら楽しんでいたのを今でも思い出します。その時、私も研究発表会でもっていた緊張感と疲れがすぐなくなって、みなさんとともにリラックスした雰囲気の中で話に熱中して席をはなれたくないくらいになりました。

パーティの中での菊地先生のあいさつにも大学と他機関との親密な交流関係を北海道が他地方より大きくもっているのを聞いてとても誇らしい気持になりました。私は今回の大会準備から終了まで、勉強になったことをわすれずに、母国に帰っても日本気象学会北海道支部の活動、特に大学との交流関係について韓国気象学会にぜひ伝えたいと思っています。

大会準備委員のみなさん、そして心の一致を見せてくれた北海道支部の会員のみなさん、ほんとうにお疲れさまでした。今後にも関連機関と大学とのあたたかい交流関係がつづいて世界を舞台とした気象学研究にもっと大きな活躍をするようにお祈り致します。

臨　時　総　会

奨励金の贈呈（三品会員の氏代理若原氏）



懇　親　会